

軍 事 史 学

第54卷 第2号

卷 頭 言

「汝の敵」を知るための政治と軍事の関係史

本村 凌 二

二十世紀は二つの悲惨な世界大戦を経験した。あまりにも被害が大きかったのはいかに、もはや戦争を望む者などいない。だからといって、犠牲の惨状だけを嘆いているわけにはいかない。いかにすれば戦争がおこらないのか、戦争を防げるか、それは依然として避けられない問題なのだ。

十九世紀以来の学問大國ドイツでも、悲惨な戦争を経験した後、軍事史はおよそ研究の対象にはならなかった。ところが三〇年ほど前から事情が変わってきたという。たんなる戦争・戦略史ではなく、「軍隊と社会」学派が探求する軍事史研究の新しい潮流が生まれているらしい。

さかのほれば、クラウゼヴィッツ『戦争論』が残されている。この古典は現代人にとっても味読されるべき著作ではないだろうか。誤解されやすいテーマだから、「汝の敵を知れ」とはこどもも肝に銘じるべきことなのだ。

クラウゼヴィッツはかの「戦争とは他の手段をもってする政治の継続にはかならない」という科白で名高い。その意味を考えると、彼が十九世紀初頭のナポレオン戦争の時代に生きたことは忘れるべきではない。まずは祖国プロイセンがナポレオンによって完膚なきまでに打ちのめされた衝撃を経て執筆され始めたのだ。

屈辱のなかで「モスクワ遠征」に出兵を命じられたプロイセン王国は惨めだった。クラウゼヴィッツは辞職し、ロシア本軍の連絡將校役を務めながら、ナポレオン本軍からプロイセン軍を切り離すべく画策する。ほどなくナポレオン本軍は厳寒期のなかで劣勢となり、この分離作戦は成功した。やがて最後の決戦となるワテルローの戦いでナポレオンは完敗する。それは軍団参謀であったクラウゼヴィッツにとって勝利の戦いであったが、その反省の上に『戦争論』は書かれたという。この本が日の目をみるのは、後に国王直属の参謀総長となるモルトケが士官学校の校長となったクラウゼヴィッツの薫陶を受けていたからである。

ここには戦争の「技術」論ではなく、戦争の背後にある「政治」のあり方がある。ときは「国王の戦争」から「国民の戦争」へと移り、二十世紀の総力戦の時代をむかえ、見誤れば悲惨な事態になりかねない。そのような戦争の歴史をふりかえりながら、政治と軍事の関係はくりかえし再考されるべき問題なのだ。

(東京大学名誉教授)